手塚治虫著「陽だまりの樹」第 2 巻　小学館 1995 年 6 月 10 日刊を読む

陽だまりの樹

Q：お会いいただけて無上の光栄にぞんじます！
１．ご両人……この桜の樹を見なさい。

２．（1）これはこの富坂でも一番の老木だそうでな。
（2）なんでも、家康公御入国の際、若木だったそうな……
（3）つまりこの樹は、徳川三百年を生きてきたことになるな。

３．（1）ここは陽当たりもええし風も強うない……
（2）この桜はぬくぬくと三百年、太平の世に安泰を保ってきたわけじゃ……
（3）ところが知らぬ間にこれこのとおり白蟻や木喰い虫の巣になってしもうたわい。

（4）徳川の世はこの陽だまりの桜の樹のようなものじゃ……

４．（1）太平の夢をむさぼるうちに幕府の中にも外にも……
白蟻共や木喰い虫共がわいて、樹を食いあらしおった。
（2）おのれの派閥だけを考えて逃げ腰で無責任なくせに利をむしばむやからが、政府の中にやたらにふえておるわ、獅子身中の虫共だ。
このままでは幕府は……いや日本は滅んでしまう！
先生!?

Q：おっしゃるとおりに思えます。私達はどうすればいいのですか、お教え下さいッ。
（1）いくつになられる？
（2）そうか……若くてうらやましいのォ……
貴君達はなんでもできるだろう。ただ孟子にこういう言葉がある。
（3）「天まさに大任をこの人におろさんとするやその筋骨を労しその身を空乏にする」――わかるかね？
（4）人は安泰の時には仕事をなまけ、苦しい時には励むものだ。だから苦しみにあうことは、次の発憤のきっかけになることだ。……苦しむことだ。若い時は苦しめば苦しむほどよい。
（5）これからの十年、たぶん日本は未曾有の大事件にみまわれるだろう。
（6）貴君達は枯れかかった徳川幕府という大樹の最後の支柱となるんだ。

Ｑ：先生！これは先生の若い時代の感慨でしょう？

５．「三たび死を決してしかも死せず二十五回刀水を渡る五たび閑地を乞うて閑を得ず三十九年七処にうつる…」

［コメント］

これは、ジョン万次郎（伊武万次郎）と山岡鉄舟（山岡鉄太郎）の二人の若者が、水戸藩の碩学（せきがく）、藤田東湖、当時 49 歳を東京の小石川の東湖塾居先の屋敷を訪れた場面でのやり取り。

手塚治虫氏の最後の著作「陽だまりの樹」からは、東京大学医学部の前身である江戸種痘所や大阪大学医学部の前身である大阪種痘所、慶應義塾大学医学部の前身である北里研究所などがどのような「志」でつくられたかがよくわかる。医学部進学を志す受験生の必読書。

― 2015 年 7 月 27 日　林　明夫記―